巻頭言

人間看護学部　学部長
森（もり）　敏（さとる）

看護界においても、Evidence-Based Nursing（EBN、科学的根拠に基づいた看護）の重要性が強調されるようになった。従来の経験に基づいた看護から脱却し、科学的に立証された看護を提供していく努力が求められている。EBNは、ケアの質を確保するだけでなく、看護の専門性を確立していく上でも重要である。

EBNのエビデンスは、調査や実験により得られたデータを統計学的に解析することにより得られる。具体的には、データを適切な検定法で解析し、有意差を確認すればエビデンスとなる。研究者はエビデンスを論文にまとめて学術誌に投稿する。かくして、エビデンスが蓄積されていくのである。

そこで、看護研究においては、統計の知識・考え方を身につけておくことが必須となる。まず、得られたデータが「質的データ」なのか、「量的データ」なのかを区別する必要がある。前者はさらに、「名義データ」と「順序データ」に分けられる。アンケートでよく用いられる「とてもそう思う」「どちらかというとそう思う」「どちらかというとそう思わない」「まったくそう思わない」の4択で得られる回答は、「質的データ（順序データ）」である。質的データは平均値をとっても意味はなく、t検定も適用できない。

統計学的検討と言えば、SPSSを使ってt検定やカイ二乗検定などを行うことのように誤解されがちであるが、"SPSSの使い方"よりも基盤となる"統計学の考え方"を身につけることの方が重要である。これを身につければ、統計の誤用を避けられるばかりでなく、結果の考察を適切に行うことができ、論文の質を高めることができる。記述統計、ノンパラメトリック検定なども、是非とも押さえておいていただきたい。